Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences) 2002, Vol. 49, 83 − 91.

学習場面におけるライバルの有無に影響する要因

── 社会的比較と対人志向性に関する意識に注目して ──[1)]

太　田　伸　幸[2)]

問題と目的

我々は社会生活を営む過程で，様々な他者との相互交渉を行なっている。その際，相手により，もしくは場面により異なる相互交渉スタイルを用い，相互交渉を通して他者と多種多様な対人相互関係を築いていく。中村（1983）は，傍らの他者との相互関係を，①目標性（協同－競争），②結合性（友好－敵対），③分化性（対等－上下）の3次元でとらえた。この次元では，目標性が複数の個人が同じ目標を持ったときに生じる関係，結合性が他者との心理的結合と分離という相互関係，分化性が他者との役割の分化の関係とされている。学校場面における生徒どうしの関係をこの3次元に当てはめてみると，友人どうしであれば協同的・友好的で対等な関係ととらえることが可能であろう。しかし，友人であっても，時として敵対的な関係になったり，競争的な関係となったりすることも十分考えられる。特に目標性の次元において，競争的な関係となった場合，友人をライバルとして認知したりすることもあるだろう。

このライバルについて，太田（2001a）は，学習場面におけるライバルを認知する理由として，他者との類似性と，他者と相互作用を求める意識をあげ，ライバルを「好敵手」「目標」「基準」に分類した。「好敵手」型ライバルとは成績が同じくらいの相手であり，ライバルも自分のことをライバルであると認知している場合である。「目標」型ライバルは，自分よりも成績が上の相手であり，相手は自分のことをライバルとして認知していない場合である。そして，「基準」型ライバルとは，自分と成績が同じか低い相手であり，「目標」と同じく相手は自分のことをライバルとして認知していない場合である。高校生では，ライバルの有無に関わらず2者が競争的な関係を築いているとき「ライバル関係」にあると認知されやすい（太田，2000）。しかし，2者関係を必ずしも想定していない個人のライバル認知では，「目標」「基準」のように一方的に相手をライバルとして認知する生徒も多いことが示された（太田，2001a）。太田（2001a）は，一方的にライバルとして認知している場合には相手を自己評価の基準や努力目標として認知する意味合いが強く，相手との比較を強く意識していることを指摘した。

また，太田（2001a，2001b）は，ライバルの不在理由として，学習に対する関心の低さや，ライバルや競争といった他者と比べることを回避する意識の存在を明らかにした。すなわち，ライバルが存在しない生徒では，他者との比較を避ける傾向や自己志向性の高さがライバルを持たないことに影響するのではないかと考えられる。

このように，ライバルの認知理由では他者との比較を行おうとする意識，不在理由では他者との比較を避ける意識が示されており，他者との比較に関する意識がライバルの有無に影響を及ぼすことが推測される。

他者との比較は，自己の意見や行動の妥当性を高め，所属する社会や集団での自分の置かれた状態・環境を良く知るため行なわれる。Festinger（1954）は，人間には自分の意見や能力を評価しようとする動機づけがある，ということを主張した。これは社会的比較理論の仮定の1つである。またFestingerは，評価のための客観的基準が使えない時は自分の意見や能力を他者と比較する，すなわち自己評価することが社会的比較の働きの中心であるとしている。このとき，比較の対象となるのは類似した他者が多い。これは，自分と類似した他者の方が，明瞭で安定した自己評価が獲得できるからである。この類似性には，ライバルの認知理由における「親近性」や「能力対等」が当てはまる。また，太田（2001a）は，ライバルの認知理由の分析より，自分の望む社会的比較の内容に沿った相手をライバルとして認知することを指摘している。物理的・心理的な近さ（親近性）や能力的な近さ（能力対等）に加えて，相手を目標として目指そうとする「目標の対象」がライバルの認知理由としてあ

1）本研究の一部は日本社会心理学会第42回大会，および日本心理学会第66回大会にて報告された。

2）名古屋大学大学院教育発達科学研究科心理発達科学専攻大学院研究生

げられており，社会的比較が単なる能力の比較に留まらず，自己高揚の比較の存在まで示唆するものとなっている。

このように，ライバル認知には他者との比較過程が存在しており，他者に対する関心の高さに影響を受けることが予測される。それは，社会的比較が，自己評価の基準を他者に求めることに由来する。しかし，ライバルの不在理由の分析からは，そうした他者との比較を避ける意識が存在することが明らかとなっている。

したがって，ライバルの存在する生徒としない生徒とでは，こうした社会的比較に関する意識，対人的志向に関する意識に差があるのでないかと考えられる。しかし，これらの指摘は，認知理由・不在理由の因子分析結果からの指摘であり，社会的比較や対人志向性の尺度を用いた検討は行なわれていない。そこで本研究では，ライバルが存在する生徒・しない生徒のそれぞれについて社会的比較や自己・他者に関する意識，対人志向性に関する意識を測定し，認知理由・不在理由との関連を基に考察を行なうことを目的とする。

社会的比較の測度については，社会的比較のどの側面を測定したいかによって使用する尺度が異なってくる。例えば，高田（1994）では，日常的に行なっている社会的比較の内容とその比較の理由に着目し，測定している。Gibbons & Buunk（1999）では，能力の比較と意見の比較に分けて，それぞれの比較を志向する意識の高さについて測定している。本研究は社会的比較を行なおうとする意識を測定したいためGibbons & Buunkの社会的比較尺度を使用することとする。次に，社会的比較の関係測度として，自己に対する注目のしやすさに着目する。他者からどう見えるかを気にする意識は，逆に他者に対する意識の向きやすさに繋がると考えられるからである。そして，その自己への注目の向きやすさに影響する要因として，自尊心の高さや自己評価的意識に関しても測定する。自尊心の高さが他者と比較する意識とどのように関連しているのかを検討する。

次に対人志向性に関する意識についてであるが，まず，辻（1993）の他者意識尺度を使用する。他者意識尺度は他者の外的側面や内的側面にどれくらい注目するかを測定する尺度であり，対人的志向を直接的に測定すると考えられる。次にパーソナリティ特性として，親和動機，シャイネス，社交性を測定する。これらのパーソナリティ特性は他者への親和性や相互作用の持ちやすさにかかわる特性であり，対人的志向と関連が深いと考えられる。そして，他者とのかかわり方に対する信念として，個人志向性・社会志向性および相互独立的・相互協調的自己観を測定する。他者との相互作用を持つ場合における，個人の考え方がライバル認知に影響すると考えられるからである。個人志向性・社会志向性については伊藤（1993），相互独立的・相互協調的自己観については高田・大本・清家（1995）の尺度をそれぞれ使用する。

本研究では測定する尺度が多いため，調査1では社会的比較に関する意識，調査2では対人志向性に関する意識とライバルの認知理由，不在理由との関連について検討することとする。しかし，社会的比較に関する意識については自己に注目する意識と他者に注目する意識との比較も行なう必要があると考えられるため，他者意識に関しては両調査とも測定し，検討する。

調査1

目的

調査1では社会的比較に関する意識とライバルの認知理由・不在理由との関連について検討することを目的とする。

方法

調査対象者

愛知県内の高校1，2年生232名（男子134名，女子98名）を調査対象とした。このうち，調査時点で学校の学習のライバルが存在すると回答した生徒は84名であった。

調査紙

以下の尺度から構成される調査紙を作成した。このうち，ライバルが存在する生徒には1および2，存在しない生徒には1および3に回答を求めた。

1．生徒の特性に関する項目

社会的比較尺度（能力の比較6項目，意見の比較5項目）：Gibbons & Buunk（1999）が作成した尺度を邦訳して使用した（例「いつも他の人がすることと比較して自分のすることに注意を向けている」）。

自尊心尺度（10項目）：山本・松井・山成（1982）の自尊心尺度を使用した（例「自分はまったくだめな人間だと思うことがある」）。

自己意識尺度（私的自己意識10項目，公的自己意識7項目）：Fenigstein, Scheier, & Buss（1975）のSCSの邦訳版を用いた（例「他人が自分をどう思っているかいつも気になる」）。

自己評価的意識（9項目）：自己意識尺度（梶田，1988）のうち，上田（1996）において「自己評価」因子に含まれる項目を使用した（例「すべてをわかってくれる友達がいる」）。

他者意識尺度（内的他者意識7項目，外的他者意識4項目）：辻（1993）の他者意識尺度のうち，空想的他者意識以外の2つの下位尺度を使用した（例「他者

のちょっとした表情の変化でも見逃さない」)。

学習態度（9項目）：FIGHT（学習意欲診断検査）を基に項目を選定し作成した（例「計画した勉強は最後までやりとげる」)。

成績の自己認知：自分の成績について評定を求めた。

成績の自己認知のみ10段階で回答を求め，他の尺度には「当てはまる(5)」～「当てはまらない(1)」までの5件法で回答を求めた。

2．ライバルに関する項目

ライバルの成績の認知：ライバルの成績について評定を求めた。

ライバルとの成績の差の認知：自分とライバルのどちらが成績が上かの評定を求めた。

ライバル意識の方向性：ライバル意識が一方的か双方向的かの評定を求めた。

ライバルの認知理由（14項目）：太田（2001a）で作成されたライバルの認知理由を尋ねる項目を使用した。相互作用（5項目），目標の対象（4項目），親近性（3項目），能力対等（2項目）の4つの下位尺度から構成される。

ライバルの成績の認知には10段階，ライバルとの成績の差の認知およびライバル意識の方向性には，選択肢から当てはまるものを選択させた。ライバルの認知理由については「当てはまる(5)」～「当てはまらない(1)」の5件法で回答を求めた。

3．ライバルの不在理由に関する項目

ライバルの不在理由（30項目）：太田（2001a）で作成されたライバルの不在理由を尋ねる項目を使用。太田（2001b）で再検討が行なわれ，自己志向性（7項目），ライバル・競争回避（6項目），ライバル不要（6項目），学習無関心（3項目），対象不在（3項目）の5つの下位尺度から構成される。

回答は「当てはまる(5)」～「当てはまらない(1)」の5件法で求めた。

結果と考察

1．ライバルの有無による比較

1．の項目のうち成績の自己認知は評定値をそのまま用い，他の尺度は下位尺度ごとの合計点を尺度得点とし，平均と標準偏差を算出した（Table 1）。ライバルの有無を独立変数としてt検定を実施したところ，社会的比較尺度（能力の比較，意見の比較）と「成績の自己認知」に有意差，「学習態度」に有意傾向の差が認められた（能力の比較 $t=2.26$，$p<.05$；意見の比較 $t=2.32$，$p<.05$；成績の自己認知 $t=2.81$，$p<.05$）。ただし，「学習態度」，「成績の自己認知」は太田（2001c）の結果よりも顕著な結果を示してはいなかった。

次に，測定した尺度の尺度間相関をライバルの有無別に算出しTable 2に示した。社会的比較は意見の比較と能力の比較の傾向は異なるとされているが，本研究の結果ではこれらの相関は高く（存在群 $r=.603$，$p<.001$；不在群 $r=.406$，$p<.001$），t検定の結果も考慮に入れると，ライバルが存在する生徒は，能力の比較・意見の比較を問わず，存在しない生徒よりも社会的比較を行なう傾向があると考えられる。また，他者意識との相関において，ライバル存在群では「能力の比較」とのみ有意な相関が認められた（内的他者意識 $r=.316$，$p<.01$；外的他者意識 $r=.422$，$p<.001$）が，「意見の比較」との相関は認められなかった。他の尺度については，比較そのものに関する意識というよりは，自己意識

Table 1　尺度の平均と標準偏差

	全　体 (231)	ライバル存在 (84)	ライバル不在 (147)	t－値
能力の比較	18.91 (3.67)	19.63 (3.35)	18.50 (3.80)	2.26*
意見の比較	16.15 (3.13)	15.77 (2.78)	15.79 (3.27)	2.32*
私的自己意識	30.84 (6.89)	30.64 (6.26)	30.95 (7.25)	−.32n.s.
公的自己意識	25.26 (5.33)	25.67 (5.17)	25.02 (5.42)	.88n.s.
自尊心	29.21 (5.99)	28.51 (5.21)	29.61 (6.37)	−1.41n.s.
自己評価意識	27.77 (5.74)	28.01 (5.75)	27.64 (5.75)	.47n.s.
内的他者意識	24.01 (5.50)	23.51 (4.89)	24.30 (5.82)	−1.05n.s.
外的他者意識	13.66 (3.39)	13.77 (3.11)	13.60 (3.56)	.38n.s.
学習態度	25.70 (5.57)	26.55 (5.15)	25.21 (5.75)	1.76+
成績の自己認知	5.43 (1.71)	5.85 (1.72)	5.20 (1.67)	2.81**

+$p<.10$　*$p<.05$　**$p<.01$

Table 2　測定した尺度の尺度間相関

	SC1	SC2	Pri	Pub	SE	SEC	OC−I	OC−O	LA	Rank
能力の比較(SC1)	—	.603***	.224*	.535***	-.152	.013	.316**	.422***	-.012	.007
意見の比較(SC2)	.405***	—	.240*	.366***	-.030	.033	.172	.198+	-.139	.003
私的自己意識(Pri)	.364***	.333***	—	.308**	.019	-.105	.562***	.247*	.192+	-.038
公的自己意識(Pub)	.564***	.223**	.276***	—	-.179	-.266*	.512***	.518***	.075	.063
自尊心(SE)	-.194*	.013	.102	-.169*	—	.501***	-.232*	-.065	-.046	.196+
自己評価意識(CEC)	-.028	.221**	.058	.041	.537***	—	-.217*	.062	.058	-.046
内的他者意識(OC−I)	.328***	.413***	.538***	.298***	.131	.142+	—	.346**	.223*	.028
外的他者意識(OC−O)	.548***	.288***	.156+	.640***	-.122	.179*	.155+	—	.110	.084
学習態度(LA)	.031	.096	.204*	.057	.233**	.306***	.151+	.105	—	.405***
成績の自己認知(Rank)	-.126	-.179*	-.004	-.050	.135	.052	.026	-.064	.413***	—

右上：ライバル存在群　左下：ライバル不在群　　+$p<.10$　*$p<.05$　**$p<.01$　***$p<.001$

Table 3　社会的比較に関する尺度と認知理由の相関

	ライバルの認知理由				ライバルの不在理由				
	親近性	目標認知	能力対等	相互性	自己志向性	ライバル・競争回避	ライバル不要	学習無関心	対象不在
能力の比較	.222*	.119	.084	.238*	-178*	.105	.098	-.063	-.109
意見の比較	.315**	.005	-.150	.235*	-.044	.049	.029	-.116	-.250**
私的自己意識	.152	.032	-.021	.240*	-.051	-.061	-.152+	-.275***	.099
公的自己意識	.288**	.249*	.041	.289**	-.242**	.068	-.040	-.186*	.013
自尊心	.097	-.044	.214+	.031	.113	-.241**	-.160+	-.101	.198*
自己評価意識	.284**	-.039	.289**	.279**	-.067	-.158+	-.149+	-.316***	.116
内的他者意識	.063	.152	-.083	.176	-.035	.040	.042	-.160+	.034
外的他者意識	.245*	.139	.158	.256*	-.211*	.058	-.040	-.205*	-.025
学習態度	-.017	.274*	-.036	.105	-.057	-.129	-.030	-.550***	.207*
成績の自己認知	-.069	.240*	-.064	.008	-.094	-.220**	-.072	-.257**	.151+

+$p<.10$　*$p<.05$　**$p<.01$　***$p<.001$

や他者意識などの，社会的比較を行ないやすいかどうかの尺度であったが，ライバルの有無においては明確な差は認められなかった。

自己意識と社会的比較尺度との相関は，ライバルの有無にかかわらず，すべて有意な相関が認められた。特に「能力の比較」と「公的自己意識」の相関が強く（存在群 $r=.535$，$p<.001$；不在群 $r=.564$，$p<.001$），ライバルの有無にかかわらず他者からどう見られているかを気にする傾向が強いほど，他者と能力を比較しようとする意識が強いことがわかる。また，自己意識と他者意識はすべて有意または有意傾向の相関が認められた。ライバルの有無にかかわらず，「私的自己意識」と「内的他者意識」（存在群 $r=.562$，$p<.001$；不在群 $r=.538$，$p<.001$），「公的自己意識」と「外的他者意識」（存在群 $r=.518$，$p<.001$；不在群 $r=.640$，$p<.001$）と強い正の相関が認められた。これは，自己の内面に意識が向きやすいほど他者の内面に意識が向きやすく，他者からどう見られているかに意識が向きやすいほど他者の外面に意識が向きやすいことを示している。

2．ライバルの認知理由・不在理由との比較

ライバルの認知理由は太田（2001a），不在理由は太田（2001b）を基に下位尺度ごとに合計点を算出し，それぞれ認知理由得点，不在理由得点とした。そして，認知理由得点，不在理由得点と尺度得点の相関係数を算出し，Table 3に示した。

社会的比較尺度（能力の比較，意見の比較）は「親近性」，「相互性」と正の相関を示した。社会的比較は自分と能力的に近い他者とより行なわれやすいとされているが，本研究の結果からはそれは認められず，それよりも心理的に近い相手と比較を行ないやすいという結果が認められた。社会的比較をすることにより，お互いの成績に目を向け，互いに上を目指そうという意識が推測される。

また，「親近性」，「能力対等」，「相互性」と正の相関があることにより，「自己評価的意識」が高い場合（自分を肯定的にとらえている）には心理的に近い相手と対等で相互的なライバル関係を持ちやすいことが考えられる。

「自己志向性」では他人との比較を避ける傾向を表わすため，能力の比較とは負の相関を示した。また，周りから自分がどう見えているかについても関心が低いため，「公的自己意識」とも負の相関を示した。「ライバル・競争回避」では「自尊心」との間に負の相関が認められた。これは，自分に自信がないため，他者との競争を避ける傾向を示していると考えられる。逆に「対象不在」が高い人は，他人と比較により自尊心を高めるため，正の相関を示している。そして，「学習無関心」は「私的自己意識」，「自己評価意識」と負の相関が認められた。このことより，学習に関心が向かない人は，自分の内面に関心が向きにくく，自分を肯定的にとらえられていない傾向を示すと考えられる。

調査 2

目的

調査 2 では対人志向性に関する意識とライバルの認知理由・不在理由との関連について検討することを目的とする。

方法

調査対象者

愛知県内の高校 1，2 年生232名（男子68名，女子164名）を調査対象とした。このうち，調査時点で学校の勉強に関するライバルが存在する生徒は90名であった。

調査紙

以下の尺度から構成される調査紙を作成した。調査 1 と同様に，ライバルが存在する生徒には 1 および 2，存在しない生徒には 1 および 3 に回答を求めた。

1．生徒の特性に関する項目

他者意識尺度（内的他者意識 7 項目，外的他者意識 4 項目）：辻（1993）の他者意識尺度のうち，空想的他者意識以外の 2 つの下位尺度を使用した（例「他者のちょっとした表情の変化でも見逃さない」）。

親和動機（8 項目）：EPPS性格検査の「親和」と「救護」の項目より抜粋して使用した（例「友達のためになることをしたい」）。

社会志向性・個人志向性（17項目）：伊藤（1993）が作成した社会志向性・個人志向性尺度を使用した。「個人志向性」，「社会志向性」の 2 つの下位尺度よりなる（例「自分の個性を生かそうと努めている」）。

相互独立的・相互協調的自己観（20項目）：高田・大本・清家（1995）の相互独立的－相互協調的自己観尺度（改訂版）を使用した。「評価懸念」「独断性」「個の認識・主張」「他者への親和・順応」の 4 つの下位尺度より構成される（例「他者の視線が気になる」）。

シャイネス（9 項目）：Cheek & Buss（1981）のシャイネス尺度を今井・押見（1987）が訳出したものを使用した（例「人といるとぎこちなくなる方である」）。

社交性（5 項目）：Cheek & Buss（1981）の社交性尺度の邦訳版を用いた（例「人と一緒にいるのが好きである」）。

成績の自己認知：自分の成績について評定を求めた。

「成績の自己認知」のみ10段階で回答を求め，他の尺度には「当てはまる(5)」～「当てはらない(1)」までの 5 件法で回答を求めた。

2．ライバルに関する項目

調査 1 と同様の項目を用いた。

3．ライバルの不在理由に関する項目

調査 1 と同様の項目を用いた。

結果と考察

1．ライバルの有無による比較

1．の尺度のうち成績の自己認知のみ回答をそのまま用い，他の尺度は尺度ごとに合計点を算出し，尺度得点とした。ライバルの有無でt検定を実施したところ，ライバルが存在する生徒と存在しない生徒の間に，対人志向性に関する尺度における差はあまりみられなかった（Table 4）。ただ，「社会志向性」に傾向差（$t=1.96$, $p<.10$），「他者への親和・順応」に有意差（$t=2.35$, $p<.05$）が認められており，強くはないが傾向としては他者との交流を持ちたいという意識がライバルを持つことに影響するのではないかということは示唆できるであろう。

次に，測定した尺度の尺度間相関をライバルの有無別に算出しTable 5 に示した。「シャイネス」と「外的他者意識」との相関がライバルの有無で異なっており，ライバル存在群では有意な正の相関が認められた（$r=.430$, $p<.001$）が，ライバル不在群では相関は認められなかった（$r=.057$, $n.s.$）。ライバル存在群では，シャイネスが高いほど他者の外的側面に意識が向きやすいことがいえよう。他の尺度と他者意識との関連ではライバルの有無による相違は認められなかった。また，「社交性」と「シャイネス」との相関はライバル存在群には有意ではなかった（$r=-.069$, $n.s.$）のに対し，ライバル不在群は有意な負の相関が認められた（$r=-.341$, $p<.001$）。社交性とシャイネスは正反対の特性を測定しているので，ライバル不在群で負の相関が認められたことは妥当であるが，ライバル存在群では認められていない。しかし，シャイネスが高いほど外的他者意識が高いため，直接の相互作用を持たなくても他者の状

Table 4　尺度の平均と標準偏差

	全体 (232)	ライバル存在 (90)	ライバル不在 (142)	t−値
他者意識				
内的他者意識	25.47 (4.76)	25.64 (4.77)	25.35 (4.76)	.46*n.s.*
外的他者意識	14.80 (3.20)	14.73 (3.36)	14.85 (3.11)	−.26*n.s.*
親和動機	30.85 (4.51)	31.38 (4.47)	30.51 (4.52)	1.42*n.s.*
社会志向性・個人志向性				
社会志向性	33.31 (4.44)	34.02 (4.10)	32.86 (4.60)	1.96+
個人志向性	26.68 (5.80)	26.50 (6.39)	26.80 (5.41)	−.38*n.s.*
相互独立的・相互協調的自己観				
評価懸念	14.78 (2.89)	14.78 (3.11)	14.77 (2.75)	.008*n.s.*
独断性	18.88 (4.09)	18.78 (4.28)	18.94 (3.98)	−.30*n.s.*
個の認識	12.44 (3.29)	12.53 (3.50)	12.38 (3.16)	.34*n.s.*
他者への親和・順応	22.95 (3.03)	23.53 (2.91)	22.58 (3.05)	2.35*
シャイネス	21.80 (5.69)	21.98 (5.92)	21.68 (5.56)	.38*n.s.*
社交性	17.03 (3.44)	17.49 (3.46)	16.75 (3.41)	1.61*n.s.*
成績の自己認	5.47 (1.89)	5.69 (1.99)	5.34 (1.81)	1.39*n.s.*

$^{+}p<.10$　$^{*}p<.05$

Table 5　測定した尺度の尺度間相関

	AM	SO	IO	IC1	IC2	IC3	IC4	SHY	SOC	OC−I	OC−O	RANK
親和動機(AM)	—	.465***	-.057	.262*	-.063	.001	.378***	.042	.679***	.292**	.339**	-.024
社会志向性(SO)	.462***	—	.279**	.068	.130	.287**	.227*	-.144	.396***	.216*	.096	-.012
個人志向性(IO)	-.017	.167*	—	-.559***	.748***	.807***	-.283**	-.588***	.037	.014	-.315**	.176
評価懸念(IC1)	.297***	.219**	-.272**	—	-.385***	-.382***	.500***	.531***	.144	.231*	.572***	-.055
独断性(IC2)	-.128	.102	.627***	-.224**	—	.583***	-.212*	-.303**	-.028	.051	-.148	.062
個の認識(IC3)	-.081	.183*	.723***	-.257**	.565***	—	-.310**	-.432***	.027	-.002	-.186+	.256*
他者へとの親和・順応(IC4)	.378***	.204*	-.178*	.282***	-.243**	-.304***	—	.296**	.267*	.369***	.405***	-.180+
シャイネス(SHY)	.023	-.145+	-.439***	.298***	-.211*	-.482***	.121	—	-.069	.015	.430***	.038*
社交性(SOC)	.585***	.313***	.103	.106	-.136	.021	.306***	-.341***	—	.164	.156	.052
内的他者意識(OC−I)	.195*	.411***	.181*	.276***	.149+	.247**	.258**	-.028	.122	—	.315**	-.334**
外的他者意識(OC−O)	.300***	.019	.032	.358***	.004	-.016	.245**	.057	.182*	.172*	—	-.140
成績の自己認知(RANK)	.185*	.280***	-.003	.066	-.011	-.017	.097	.085	.025	.116	-.059	—

$^{+}p<.10$　$^{*}p<.05$　$^{**}p<.01$　$^{***}p<.001$

態を把握することができているのであろう。

他者とのかかわり方に対する信念間での相関は，「個人志向性」と「相互独立的自己観」(独断性，個の認識)，「社会志向性」と「相互協調的自己観」(評価懸念，他者への親和・順応) のそれぞれにおいて，おおむね正の相関が認められた。また，「個人志向性」と「相互協調的自己観」とは負の相関が認められた。特に「個人志向性」と「相互独立的自己観」の相関が高く (存在群:独断性 $r=.748$, $p<.001$, 個の認識 $r=.807$, $p<.001$；不在群:独断性 $r=.627$, $p<.001$；個の認識 $r=.723$, $p<.001$)，個人志向性が強いほど人はそれぞれ独立した個人であるという認識を持つということを示している。また，「評価懸念」と「外的他者意識」がライバルの有無を問わず有意な正の相関を示した (存在群 $r=.572$, $p<.001$；不在群 $r=.358$, $p<.001$)。自身が評価されることを恐れるのと同時に他者の外的側面にも注意が向きやすいことを現していると考えられる。

2．ライバルの認知理由・不在理由との比較

次に，ライバルの認知理由は太田 (2001a)，不在理由は太田 (2001b) を基に下位尺度ごとに合計点を算出し，それぞれ認知理由得点，不在理由得点とした。そして，認知理由得点，不在理由得点と尺度得点の相関係数

Table 6　対人志向性に関する尺度と認知理由不在理由の相関

	認知理由				不在理由				
	親近性	目標の対象	能力対等	相互作用	自己志向性	ライバル・競争回避	ライバル不要	学習無関心	対象不在
他者意識									
内的他者意識	.103	.033	-.014	.052	-.149 +	.034	-.170 *	-.148 +	-.037
外的他者意識	-.024	.004	-.014	-.026 +	-.137	-.025	-.030	.087	.119
親和動機	.177 +	.109	-.125	.202 +	-.156 +	-.002	.000	-.289 ***	.127
社会志向性・個人志向性									
社会志向性	.173	.115	-.150	.201 +	-.115	-.138	-.194 *	-.331 ***	.028
個人志向性	.226 *	-.012	.122	.348 ***	.093	-.103	-.038	-.072	-.029
相互独立的・相互協調的自己観									
評価懸念	.006	.114	-.248 *	-.072	-.253 **	.021	-.130	-.107	.076
独断性	.237 *	-.010	.074	.324 **	.106	-.105	-.017	-.040	.004
個の認識	.177 +	.056	.077	.333 **	.071	-.089	-.044	-.081	-.012
他者への親和・順応	-.014	.173	-.030	-.096	-.107	.076	-.056	-.121	-.047
シャイネス	-.093	.011	-.036	-.037	.005	.099	-.006	-.067	.008
社交性	.086	-.091	-.019	.057	-.176 *	.005	-.077	-.219 **	.106
成績の自己認知	-.055	-.032	-.056	.072	-.124	-.123	.040	-.366 ***	.123 *

$^{+}p<.10$　$^{*}p<.05$　$^{**}p<.01$　$^{***}p<.001$

を算出し，Table 6 に示した。

「個人志向性」，「個の認識」，「独断性」など，自分には自分の考えがある，自分の考え方に行動は依拠しているなどという考え方を示す尺度と「相互作用」との間に正の相関が認められた（個人志向性 $r=.348$, $p<.001$；個の認識 $r=.324$, $p<.01$；独断性 $r=.333$, $p<.01$）。周りとの相互作用が自分の能力を伸ばすことに必要であると認知し，自発的に他者との関わりを持とうとしていることがうかがえる。また，これらの尺度は「親近性」とも同様の傾向を示しており，心理的に近い他者との相互作用で自分を伸ばそうとしていると考えられる。また，この結果は「親和動機」も「親近性」，「相互性」と正の相関を持つことからもうなずけるであろう。そして，「評価懸念」と「能力対等」との間に負の相関が認められた（$r=-.248$, $p<.05$）。対等な相手と比較すると明確な評価が下されるので，それを避けようとする意識が働いているのではないかと考えられる。

「自己志向性」では，「評価懸念」と負の相関を示しており（$r=-.253$, $p<.05$），他人と比べたくないという意識の中に，他者からの評価を避けるという意識も含まれていることが考えられる。「ライバル不要」とは「内的他者意識」，「社会志向性」が負の相関を示しており（内的他者意識 $r=-.170$, $p<.05$；社会志向性 $r=-.194$, $p<.05$），他者の内面には関心を持ちにくい傾向が現われていると考えられる。そして，「学習無関心」では「親和動機」，「社会志向性」，「社交性」など，他者との交流を持ちたいという意識，他人の考えを参考にしたいという意識と負の相関を示している（親和動機 $r=-.289$, $p<.001$；社会志向性 $r=-.331$, $p<.001$；社交性 $r=-.219$, $p<.01$）。学習に対して無関心な生徒は，他人に関しても無関心な傾向を示すことをあらわしているといえよう。

総合考察

1．社会的比較，対人志向性とライバルの有無との関連

本研究において，社会的比較をしようとする意識に注目して検討した結果，部分的ながらも社会的比較に関する意識の高さがライバルの有無に影響することは示唆されたといえよう。しかし，能力や意見は必ずしも学習に関する事柄について限定したものではなく，一般的な比較のしやすさであったため，学習場面に限定した本研究においては，関連が見出されにくかったのではないかと考えられる。また，これは親和動機やシャイネス，社交性などのパーソナリティ特性についても同様なことが想定される。たとえば，親和動機は他者全般に対する親和動機であり，ライバルのみに対する親和動機を想定していない。これらのパーソナリティ特性にライバルの有無で差が認められなかったのは，特定の相手に対する親和性と一般的な親和性とが必ずしも一致するわけではないことに示唆している。したがって，ライバル（もしくはライバルに相当するような存在）に対する親和動機の高さを比較する必要があるのではないかと考えられる。

対人志向性に関する意識の検討では，他者との相互作用に関する意識の高さがライバルの有無に影響すること

を示唆された。社会的比較と同様に，その傾向は弱く，特定の相手に対する意識は一般的なパーソナリティ特性とは必ずしも同様な傾向を示すわけではないことが考えられる。しかしながら，本研究の結果より，太田（2001a，2001b）で示唆されたライバルの有無に対する社会的比較および対人志向性の影響が部分的に支持されたことは，ライバルを持つことの意義を考える上で有用な示唆をもたらすであろう。

2．ライバルの認知理由・不在理由との関連

ライバルの認知理由との関連においては，社会的比較においても対人志向性においても，相手との相互作用に関する意識との相関が認められた。すなわち，ライバルと相互作用を持とうとする意識には社会的比較や対人志向性に関する特性が影響するといえよう。特に，対人志向性に関する意識の中でも，個人志向性や個の認識など，独立した個人であるという認識が強いほど，相互作用をライバルの認知理由として強く意識する傾向にあったことは興味深い。これはすなわち，他者とのかかわり方として，相互が独立した存在であると認識している方が，他者との相互作用の有用性を意識しやすいことを示唆している。

次にライバルの不在理由との関連においては，社会的比較，対人志向性の両方において自己志向性との相関が認められた。公的自己意識や能力の比較，評価懸念と相関が認められており，他者と比較する，もしくは比較されるのを避けようとする傾向を示している。ライバルが存在しない生徒は，ライバルを能力を比較する対象としてとらえる傾向があると考えられる。そのため，他者に評価される場面や明確な評価を下されるような場面を避け，ライバルとの比較を回避しようとしているのであろう。

3．本研究のまとめと今後の課題

本研究ではライバルの有無に関する影響について，社会的比較と対人志向性に関する尺度を使用して，ライバルの認知理由，不在理由との関連を検討した。その結果，社会的比較，対人志向性ともに，ライバルの有無に影響を与える傾向が示唆された。しかし，ライバルに対する意識の測定とはなっていないことが示唆にとどまる要因として考えられるため，今後はライバルに対する社会的比較や対人志向性について測定し検討していくことを求められる。

また，相互作用の持ちやすさがライバルの認知理由，不在理由のどちらにも関連していた。ライバルとの相互作用に対する意識についてはほとんど検討がなされておらず，今後は相互作用にかかわる意識についてより一層の検討が必要となるであろう。

引 用 文 献

Cheek, J. M., & Buss, A. H. 1981 Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology,* **41**, 330-339.

Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Private and public self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* **43**, 522-527.

Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations,* **7**, 117-140.

Gibbons, F. X., & Buunk, B. P. 1999 Individual differences in social comparison: Development of a scale of social comparison orientation. *Journal of Personality and Social Psychology.* **76**, 129-142

堀野緑・森和代　1991　抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因　教育心理学研究，**39**，308-315.

今井明雄・押見輝男　1987　シャイネス尺度の検討　日本社会心理学会第28回大会発表論文集，66.

伊藤美奈子　1993　個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討　心理学研究，**64**，115-122.

梶田叡一　1988　自己意識の心理学　第2版　東京大学出版会

中村陽吉　1983　対人場面の心理　東京大学出版会

太田伸幸　2000　ライバル関係を認知する基準の検討－高校生の持つライバル観の測定より－　日本性格心理学会第9回大会発表論文集，30-31.

太田伸幸　2001a　学習におけるライバルを認知する理由の検討　性格心理学研究，**10**，45-57.

太田伸幸　2001b　学習におけるライバルの不在理由の検討－学習態度と成績の自己認知に注目して－　日本心理学会第65回大会発表論文集，749.

太田伸幸　2001c　ライバルの有無に影響する要因の検討－競争に関する意識に注目して－　日本教育心理学会第43回総会発表論文集，264.

高田利武　1994　日常事態における社会的比較の様態　奈良大学社会学部紀要，**23**，201-210.

高田利武・大本美千恵・清家美紀　1995　相互独立的－相互強調的自己観尺度（改訂版）作成　奈良大学社会学部紀要，**24**，157-171.

辻平治郎　1993　自己意識と他者意識　北大路書房

上田琢哉　1996　自己受容概念の再検討－自己評価の低い人の“上手なあきらめ”として－　心理学研究, **67**, 327-332.

山本真理子・松井豊・山成由紀子　1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究, **30**, 64-68.

(2002年9月30日　受稿)

ABSTRACT

The relation of the existence of rivals on learning situation to social comparison and interpersonal orientation

Nobuyuki OTA

The purpose of this study was to investigate factors that affected the existence of rivals on learning situation among the high-school students and to account for the relevance between those factors and rival cognition or absence. 464 high school students answered 2 questionnaires of the following 3 types; 1) rival cognition, 2) rival absence, and 3) social comparison(study 1) or interpersonal orientation(study 2). T-tests were performed using 3) as predictors of rival existence. It was shown that the difference had social comparison and interpersonal orientation between rival presence and absence. A correlation analysis between 3) and 1) or 2) revealed that higher self-orientation was related to higher cognition to mutual action with rivals and higher evaluation concern was related to lower self-orientation. These results suggested that belief that social comparison motivation and interpersonal orientation were necessary to have a rival.

Keywords: rival, social comparison, interpersonal orientation, rival cognition, rival absence